

美術科の「やりくり」のたとえば

～「作品との対話」～多様な視点で物事を見つめ、その世界観を深める力～

木村 信一郎

鳥取大学附属中学校 美術科

E-mail: kimura_si2@tottori-u.ac.jp

Shinichiro KIMURA (Tottori University Junior High School): An example of “Managing for solving problems” in art education. Dialogue through works - Ability to look at things from various perspectives and deepen their views of the world-

要旨 — 「想像力により人間関係を構築してゆく力」の養成をめざして、全学年の美術科教育での表現と鑑賞活動に、オルタナティブ活動(物事を多角的な視点で見つめることに重点を置いた活動)の導入を試みた。題材として用いたのは主に肖像画である。作品に「なる」行為で鑑賞することで、それらを鑑賞して感じたことを相互に出し合い、他者の感じ方をとりいれることで、自己の鑑賞力の幅と深さを高めることを目指した。このような相互討論の課程の取り入れは、鑑賞力の向上に有効であった。

キーワード — 肖像画, オルタナティブ, 作品との対話

Abstract — I have tried to introduce “alternative activities” which emphasize rearing of abilities to look at things multi-directionally to expression and appreciation activities in art education of the all grade of junior high school to nurse “ability for constructing harmonious human relations with imaginative power”. By appreciating the portrait in the act of “become”, The aim of the activity was to develop and enhance breadth and depth of appreciative power, by sharing their impressions obtained through watching those works. It was found that introduction of such discussion to a class of art was effective in improving appreciative power.

Key words — Portrait, alternative, dialogue through works

I. 美術科の取り組みの概要

1. はじめに

「作品との対話」

「対話」という表現は、“向かい合って話し合うこと。また、その話。”とあるように、互いに顔を見合わせ、声で会話する活動のようにとらえられることが多いであろう。ここで私があげる「対話」とは、アメリカ・アレナス氏が提唱した“思考能力、対話能力の向上を目的に実践される対話による美術作品の鑑賞法”(＝対話型鑑賞)を示している。たとえば、鑑賞活動であれば、級友、先輩、後輩の作品に対して、直接的であったり、間接的であったり、方法は様々であるが、自分が感じ取った作品への思いを送る活動は、作品を紹介した「他者との対話」といえよう。教科書や直接出会えない作家たちの作品について考える活動も「作品(＝他者の思

い)との対話」と考えることができる。また、制作(表現活動)も「対話」と捉えて授業展開を行っている。例えば、これから描こうとする白い紙、形を作ろうとする素材がなるべく姿、色はなんだろう形はどうだろうと自分自身に投げかける表現活動は、作品を介して自分自身の思いを探る「私との対話」と考えることができる。

「多様な視点で物事を見つめ、その世界観を深める力」

国際化、少子高齢化等、様々な変化が進む我が国において、生徒たちを取り巻く未来は予測不可能な世界となると考えられる。近年、内閣府が打ち出す Society5.0 時代には①「読解力、情報活用能力」②「教科教育の学びを自分の頭で働かせて表現する力」③「対話・協働を通じて知識・アイデアを共有し新しい解や納得解

を産み出す力」が必要と言われている。そういった状況の中において、異文化コミュニケーションや世代間コミュニケーションといった多様なコミュニケーション能力は社会人として強く求められる時代となるだろう。そのような世界を担う生徒たちに対し、コミュニケーション能力として「想像力により、人間関係を構築していく力」「人と人をつなぐための能力」が、今後必要であると強く考えるようになった。そこで、先に述べた能力を育てるための美術教育の在り方や方法を、表現と鑑賞の活動を通して広く探求することを目的として本テーマを設定した。

2. 研究の視点

「物事を決まった一方向からではなく、多角的な視点で見つめること」

具体的に「想像力により、人間関係を構築していく力」「人と人をつなぐための能力」を育成するためには何が必要なのか。人は、それぞれ立場や価値観によって物の見方が異なる。物の見方が人によって異なっていることを理解し、「他の人の価値観を理解すること」とともに、「自分の価値観を他の人に理解してもらうこと」が人間関係を構築していくための第一段階である。そのためには「物事を決まった一方向からではなく、多角的な視点で見つめること」を重点においた活動(=『オルタナティブ(もう1つ別の)活動』と定義する)が重要と考えた。たとえば、表現においては、発想や構想したことを材料や用具を使って実際に表現する中で、他者の表現や、意見を取り入れることにより、よりよいものに高められることがある。創造的な技能においても、発想や構想をしたことが具体的な形として現れ、表現を追求していく中で、技能が高まったり新たな技能を発揮していく。鑑賞においては、他者の考えなども聞きながら、自分になかった視点や考え方を発見し、それらを取り入れながら、自分の目と心でしっかりと作品をとらえて見ることにより、自分の中に新しい価値が作りだされていくことになる。ただ、作品とは、それぞれ制作された時代背景やその時の作者が置かれている状

況、性格などが複雑に絡まって生み出されたものである。「多様な視点で物事を見つめ、その世界観を深める力」が身に着いていく授業展開を考える中で、ある程度の知識をやりくりしながら、作品の世界観を深める展開も1つであり、そういった要因を控えて作品自体から伝わる魅力を味わう展開も1つである。授業では、ペアや小グループ、クラス全体など形態を変えながら、表現と鑑賞の活動の中で生徒それぞれが別の視点で考え、共有し高め合う「オルタナティブ活動」を授業で実践しながら研究を重ねてきた。

「鑑賞と表現の流れを一体化した短時間教材の開発」

美術科には、表現と鑑賞の二領域がある。令和3年度より、実施となる学習指導要領において、評価の観点が整理されて、4観点から3観点到に整理されたように、今後は表現と鑑賞の一体化も求められるだろう。鑑賞には、自他の作品などについて考えや思いを深く追求する活動があるが、それには、「個でじっくりと味わい、考えること」のみならず、「他者と考えや思いを共有し、高めること」が美術教育には求められていると考える。表現も同様のことが言え、自己の満足で終わるものではなく、作品への思いを他者に伝え、共有し、自己の心理を深く見つめ、その世界を表現しようと追求することが必要であると考え。つまり、鑑賞と表現はどちらも同じく、自分と他者との関係の中で高められるものであると言える。しかし、授業数の減少、表現活動の時間の確保などによって、現状としては、表現と鑑賞が分断化され、鑑賞が単一単元で扱われることが多い。そこで、授業としては、鑑賞と表現の流れを一体化した短時間教材の開発、実施をしている。これまで身に付けた知識、技能を駆使し、また、自己発信、他者理解を繰り返しながら、一方的な見方に捕らわれず、新たな見方を生徒同士が共有しながら「やりくり」の力を身に付けさせたいと考える。そのためには、ただ知識や技能を教え込んで与えるのではなく、その原理や意味を考えさせ、理解させる必要がある。

II. 授業

1. 題材と対象学年、実施期間

題材名：「作品との対話～みる・なる・しる～」

対象学年：全学年

実施期間：4月～7月に1～2時間

2. 授業構成

本題材は、前期前半に全学年で行っている。「作品との対話-多様な視点で物事を見つめ、その世界観を深める力-」は、「生徒の学びの充実」+「限られた時間数」=鑑賞と表現の流れを一体化した短時間教材の開発を踏まえて、各学年の成長過程、学習目標に応じて鑑賞対象を設定している。授業内容は共通して、次の①～③の3過程である(表 2.1)。

表 2.1

	学びの過程	内容
①	「みる」	時代背景も含めて作品を鑑賞。
②	「なる」	作品の登場人物の心情を考え、表情、動きを演じ写真作品を制作。
③	「しる」	①②の活動を通して、個人、集団(班・学級)で深く学ぶ。

なお、今年度は、コロナ禍を踏まえて、②の過程において、図 2.1 の[1][2]を授業形態に取り入れて行っている。

[1]撮影時のみマスクを外し、作者の気持ちを表情で表す。

[2]撮影は距離をとって行い、パネル及び撮影機材はその都度消毒を行う。



図 2.1

3. 各学年の授業構成

3.1. 第1学年



第1学年では、美術作品との出会いを目標にレオナルド・ダ・ヴィンチ作「モナ・リザ」を扱っている(図 3.1)。作品の選定は、事前のアンケートから知っている名画として多く挙げられた作



図 3.1

品であること、教科書・美術資料に準じているという点で選んでいる。長年全世界で普遍的な魅力を持つこの作品を3年間の「みる・なる・しる」の鑑賞活動の導入として実施した。

3.2. 第2学年

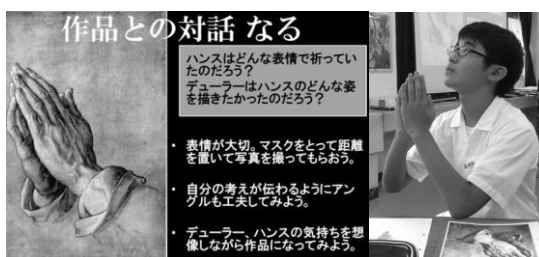


図 3.2

第2学年は、顔と手の表情とその表現のよさを学ぶことを目標にアルブレヒト・デューラー作「手」を扱っている(図 3.2)。作品の選定は、教科書・美術資料に掲載されており、2年時で扱う作品に準じている点で選んでいる。ただ、例年はレオナルド・ダ・ヴィンチ作「最後の晩餐」を扱っていた。それぞれが演じる人物像を個々で設定しながら、身ぶり手ぶり、表情を作り表現しようとする姿や、衣装や小道具を自主的に準備するなど、やりくりする姿が見られる活動であったが、今年度は、コロナ禍ということもあって、複数の人物を密接した形で行う要素があるので、先の作品を扱っている。

3.3. 第3学年



第3学年は自画像を制作する過程で4人の作家の自画像を2点ずつ使用した。いずれも本教科書・美術資料に掲載されている作品から同一作家の制作時代の比較、多岐に渡る作風等を考慮して選んでいる(図 3.3-1)。



図 3.3-1

また、これまで①の活動において教師がスライドで伝える学習を行っていたが、作品に対してより探究心を持って向き合うことをねらい、作品・作者についての時代背景を含めて書かれた説明文をもとに自分たちが「なる」作品を想像して描き(図 3.3-2), そのうえで作品を「みる」活動を行った。

- 本作品は、作者が90歳のころに制作した自画像である。
- 写実的な表現を幼少期に習得し、青年期に「青の時代」「バラ色の時代」と画風を変化させていった。
- 作者は、絵画にとどまらず、彫刻、版画、陶器と多岐に渡り、生涯に8万点もの作品を制作した。
- 本作は、作者の代表的な作風である「キュビズム」を踏まえつつ、新たな作風を見出そうとした晩年の作品である。

図 3.3-2※説明は図 3.3-1 の⑧について

Ⅲ. 生徒の観察と分析

1. 第1学年

図 1.1,2は授業時の様子及び授業後の生徒の振り返りを分析したものである。図中の過程はⅡ2の3過程を示しており、内容として多いものをまとめ、順に示している。図 2.1, 3.3も同様とする。

過程	振り返り内容
②	* 作品の中に入って考える感じが楽しかったです。
①②	* 「みる」でいろんな疑問を持ち、「なる」で少しずつ分かるのを感じた。
②	* 「なる」活動で作品がグッと近くなりました。
①②	* 「みる」を踏まえて「なる」と視野が広がった気がしました。
②	* 作品の内側に立つ、対話する鑑賞がとても新鮮でした。
③	* 話し合いによって新しい発見があった(顔の角度、思い)
①	* 謎が多いからこそ世界を魅了する作品だと分かった。
①	* 技法の効果を理解しそれが作品の雰囲気を作っていることがわかった。
①③	* アドバイスをもらいながらやったので実際彼女もアドバイスをもらったのかなと思った。
①②	* 口は笑っていたけど目は悲しそうだった。

図 1.1

多くの生徒が興味を持った①「みる」活動は教

師による作品について制作背景の解説を聞く過程である。一般的によく知られた作品であったため、それぞれが作品に対して持つイメージがあり、そこからの意外性を聞く活動は、生徒にとって興味深か

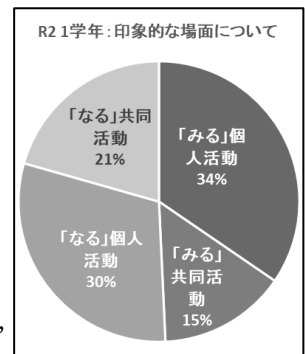


図 1.2

ったことが伺える。それを踏まえて②「なる」活動では、作品の内側に立つという考え方に興味を持ち、意欲的に取り組む姿が多く見られたが、①で得た制作背景を再現しようとす過ぎて、作品に対して自分なりの「物語」を描くというよりは、正解を求めるような姿が多く見られた。これは、「みる」活動における情報量、情報の与え方について、個々の想像力を引き出す手立てとして、今後の改善が必要と考える。

2. 第2学年

生徒は定期試験で本作品について自分なりの「物語」を持った上で授業に臨んでいる。それぞれが作品に対して抱いた「物語」を共有し、事実を紐解いていく形で「みる」活動を行った。図 2.1,2は授業時の様子及び授業後の生徒の振り返りを分析したものである。

過程	振り返り内容
②③	手の表情を作る中で、ハンスの苦勞と願いが知れた。
②	願う気持ちが伝わるように「なる」を行った。
②	真剣な顔か立っているのではと思った。
②③	今日は表現できなかったが涙を流していたのかもしれない。苦勞したからこそデューラーと同じ思いをさせたくなかったのではとも感じた。
①	自分が想像していた作品の背景と大きく違い感動した。
①	絵の背景は自分ではなく人のために祈っていることがわかり、とても切ない絵と感じた。
②③	何かを祈ることは表情に現れると思い、「なる」活動で客観的にみると自分は何を思いながら祈っているかわからないので事実を含めた上で考えることが大切であると思った。
②	きっと優しい顔をしていたのではと思い、演じてみた。
②	あえてハンスが伸ばすことができなかった曲がった指を伸ばして表現した。
②③	事実を知って驚いた実際やると辛さが伝わってきて悲しかった。
③	考えて話し合う中でさまざまな感じ方があっておもしろかった。

図 2.1

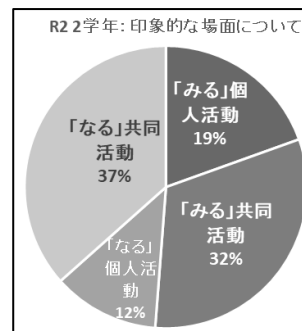


図 2.2

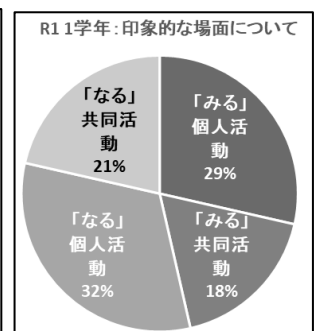


図 2.3

図 2.1 が示すように、生徒は①「みる」②「なる」の活動に興味を示している。特に本時の場合、試験で各々が作品に対する「物語」を明確にしていたこともあり、①の過程において、積極的に作品について意見を交わす様子が見られた。また②の過程においても自分が作者、モデルの思いをどう表したいかを伝えて、アングルなど、細かく写真の撮り方を伝えながら「なる」活動に取り組む様子が多く見られた。作品は「手」のみの描写がゆえ、顔の表情は想像するしかなく、生徒は、「手」から読み取れる人物の感情を想像しながら、顔の表情を表そうと試みていた。図 2.2 の今年度の振り返りと、図 2.3 の昨年度の 1 年時の振り返りを比較すると①②の活動における互いの意見を共有する共同活動に興味を示していることがわかる。これは継続した学びの過程の中で共同活動（オルタナティブ活動）が根付き、生徒の学びの中心になりつつある様子を示しているといえよう。

3. 第 3 学年

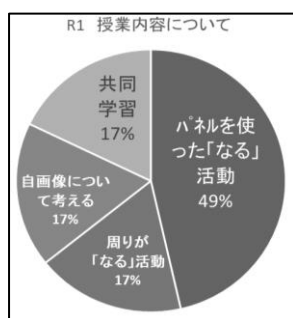


図 3.1

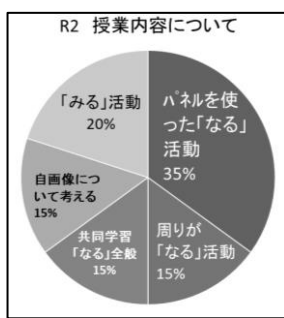


図 3.2

Ⅱの 3.3 で述べた通り、これまでの研究を踏まえて①「みる」活動に共同活動を取り入れた。図 3.1 は昨年度、図 3.2 は今年度を比較の通り、これまで見られなかった①「みる」共同活動に興味を示した様子が表れている。図 3.3 は授業後の生徒の感想を分析したものである。個々が持つ知識と説明文から考えられるそれぞれの捉え方を持ち寄り、作品を表現する活動は、作品への思いを掻き立て、意欲的に取り組んだ様子が伺える。また、図 3.4 は授業後に行った定期試験の問題文と正答率を昨年度と比較したものである。先に述べた通り、今年度「みる」活動の改善を行ったことが大きく影響し、「みる」活動での知識獲得が、顕著に表れているこ

とがわかる。

過程	振り返り内容
①②③	「みる」活動で作品の表情をみんなで考えたので、「なる」活動ではそれを表現しようとする中でさらに作品への思いが広がったような気がする。
①②③	3年目の活動で、一番作品、作者の気持ちに近づけたと思いました。
②③	言葉だけでは伝わらない作者の思いが、作品を通して伝わることに「なる」活動はより深く繋がるのかなと3回目で感じました。
②	「なる」活動はこれから先、作品を見るときには実際にやれないと思うけど、心の中でイメージしながらこれからも作品をみれたらなと思いました。
①②③	みんなの考えを絵で描いたり、写真で表すことで、作者がこの作品を描くまでにどのような人生を歩んできたところまで広がりました。この経験はこれから別の作品を見るときにつなげたいと思いました。
①②③	年老いたころの姿だったが、「みる」で考えていた感情を表現しようとしたら視線は生き生きとした感じでみんな表現していたので、それだけ作者の情熱みたいなのがあったのかなと思いました。
②③	正面を向けない作者は物事から目をそらしていたのかなと感じました。
①②③	「みる」「なる」の活動で同じ作品なのにそれぞれがどうとらえているかをしる活動が楽しかった。
③	どういう気持ちだったのかといろいろな視点に立ててみるのが楽しかったです。
②③	なりきれたかどうかはわからないけど、作者の気持ちをみんなで考えたことで近づけたのかなと思う。

図 3.3

Ⅰ. 次の作品について各問に答えなさい。

ア イ ウ エ オ

カ キ ク ケ コ

①図ア～オの作者名を語群Bから選んで記号で答えなさい。
複数使っても構いません。
④図シの人物は図サの作者である。
作者名を語群Bから選んで記号で答えなさい。
⑤図サのものとなった作品を描いた人物名を語群Bから選び、
[1]記号で答えなさい。また[2]もとの作品を「友人」[耳]を使って説明しなさい。

Ⅱ. 次の各問に答えなさい。

A B C D E F

②図Bは人物と共に動物が描かれている。それはなにか。答えなさい。
③図Cは光が強調されたドット絵的な作風を得意とした作家の作品である。
このような作風を題材4文字で答えなさい。

G H I J K

L M N O P

⑤図Kと同じ様式で描かれた作品をG～Lの中から選び、その作者名を語群Aから選んで答えなさい。
⑥図Iは作者が何歳の時に描いたのか。答えなさい。
⑦図Pの人物の顔に描かれている人物名と作者の関係を答えなさい。

問題	①	④	⑤	②	③	⑤	⑥	⑦
2019年度	33%	56%	75%	62%	35%	22%	35%	64%
2020年度	71%	72%	58%	69%	71%	77%	71%	70%

図 3.4

Ⅳ. 今後の取り組み

これまで、鑑賞と表現の流れを一体化した短時間教材の開発に年間を通じて取り組み、各成長段階に応じた学びの充実に向けてきた。「なる」鑑賞活動は、作品の内側に立ち、その作品を深く味わう活動で、本校に赴任してから継続して取り組んでいる。また、第3学年の題材において、多くの生徒の言葉に、“3年目の活動で、一番作品、作者の気持ちに近づけた”、“3

回目だからこそ、言葉だけでは伝わらない作者の思いが、作品を通して伝わることに「なる」



活動はより深く繋がる感じた”とあったように、学年なりの成長段階に応じて実施しているからこそ、鑑賞活動

に対する意欲の変化が表れたと考えている。また“「なる」活動はこれから先、作品を見るときには実際にやれないと思うけど、心の中でイメージしながらこれからも作品をみていきたい”など、今後の生活の中における鑑賞の仕方について言及する様子も多く見られ、授業で終わらず、広がるようになっていると考えている。また、生徒の中には、ただ単に現存する作品を再現するのではなく、その作品に込められた作者の思いを考え、そこに自分なりの解釈で「物語」を見出し、鑑賞から表現へと発展させる姿が見られた。

右の図1は、第1学年の「なる」活動における場面で、「モナ・リザ」の鑑賞後、様々な肖像画として紹介したときの様子である。生徒は、それぞれの肖像画に扮し、それぞれの作品の時代背景を踏



図1

まえて会話する“遊び”を始めた。それはこちらが意図したことではなく、「なる」の活動の経験から生徒が獲得した新たな発想の姿であ



どんな表情をハンスがしているか
を考えておくことができた。
ハンスの伸ばすことができなかった
手を表現できた。 図2

った。図2は第2学年の「なる」活動における場面である。生徒はただ単に作品を再現するのではなく、人物の思いを自分なりに汲み取り、意図的に変化を加えて扮した姿である。こうした作品の良さを伝え、味

わう鑑賞活動だけにとまらず、「なる」活動を表現活動として自然と捉え、追求する姿は、昨年よりも多く見られ、今後題材の発展を考える際に、表現活動としてのよりよい展開を考慮する必要性を感じている。



作品が優先されがちな美術教育の現状において鑑賞の過程からの表現、また、鑑賞を踏まえての表現といったように鑑賞を含めた学びの跡に作品が残る実践を今後も取り組んでいきたいと考える。そして、中学3年間という成長過程と関連づけて行った効果について今後も研究し続けたいと考える。

文献

- 上野 行一(2001)まなごしの共有—アメリア・アレナスの鑑賞教育に学ぶ. 淡交社(東京)
- 鈴木有紀(2019)教えない授業 美術館発,「正解のない問い」に挑む力の育て方. 英治出版(東京)
- 中尾尊洋ら(2019)鳥取大学附属中学校研究紀要 第51号 学ぶ力を育む「やりくり」授業の開発. 鳥取大学附属中学校(鳥取)
- 永田佳之(2005)オルタナティブ教育. 一国際比較に見る21世紀の学校づくり. 新評論(東京)
- 中村政人ら(2018)美術の授業ってなんだろう?. 全国美術・教育リサーチプロジェクト事務局(東京)
- 文部科学省国立教育政策研究所(2020)「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校 美術